

平成28年度学校経営計画

平成26年度～平成28年度

校番	37	学校名	広島県立庄原格致高等学校	校長氏名	今岡 護	全日制	本校
----	----	-----	--------------	------	------	-----	----

1 ミッション (地域社会における本校の使命)

「格物致知を旨として、広い英知を磨き、豊かな情操を育む。」

県北地域の期待に応え、国際社会の発展、郷土の発展に寄与するため、深い探究心・思考力・判断力を持ち、自らの夢や目標に向かって挑戦する生徒を育成する。

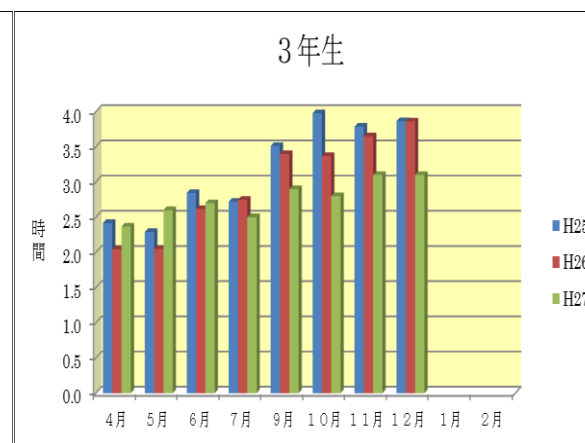
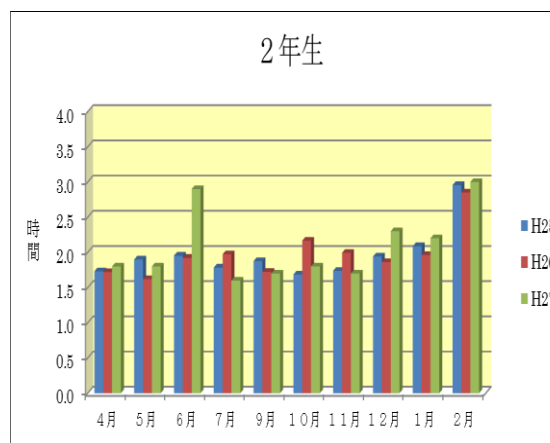
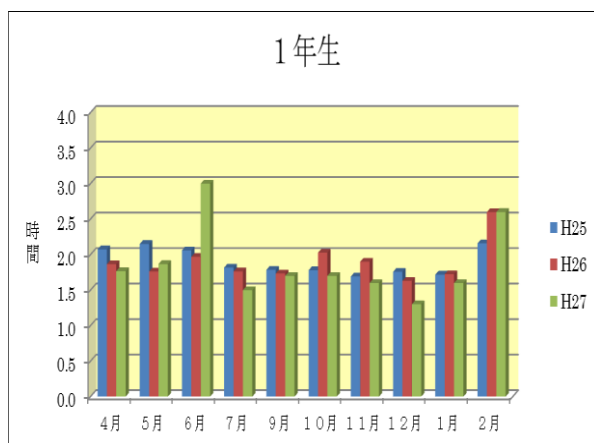
2 ビジョン (使命の追求を通じて実現しようとする本校の将来像)

目指す生徒像

- ① 人格の完成を目指し、豊かな心と生き抜く力を身につけた生徒
- ② 自主的精神に満ち、自己実現を図るため自己管理をおこない、向上心を持って信念を貫く生徒
- ③ 自他を尊重し、人間関係を大切にする、徳性の高い生徒
- ④ 国際社会・地域社会に貢献しようとする生徒

3 環境分析

(1) 家庭学習時間 (過去3年間推移)



教務部

- ・ 入学直後から家庭学習習慣の定着について指導を行い、多くの生徒が2時間程度の家庭学習時間を確保することはできているが、学習に対するモチベーションを自ら維持・向上させ、自律的な学習態度へ導くには至っていない。早い段階で“躰”としての家庭学習の習慣化から、能動的な学習意欲の向上へ結びつく取組へ重点を切り替える必要がある。
- ・ 生徒の学習への動機付けについては、進路指導を始め、本校の様々な教育活動を通じて、体系的に行う必要がある。その際、個々の効果的な取組を共有し、組織的に進めることも重要である。

1 学年

- ・ 学習習慣の定着は一定程度達成できたが、学習時間から見える定着状況は2極化しており、全体としては学習時間が減少傾向にある。
- ・ 定期試験を一つの区切りとした、課題の提出や小テストの追試指導は一定の効果があったが、学習内容の質的な向上や、自律的な学習について、十分な動機付けを図ることが出来なかった。

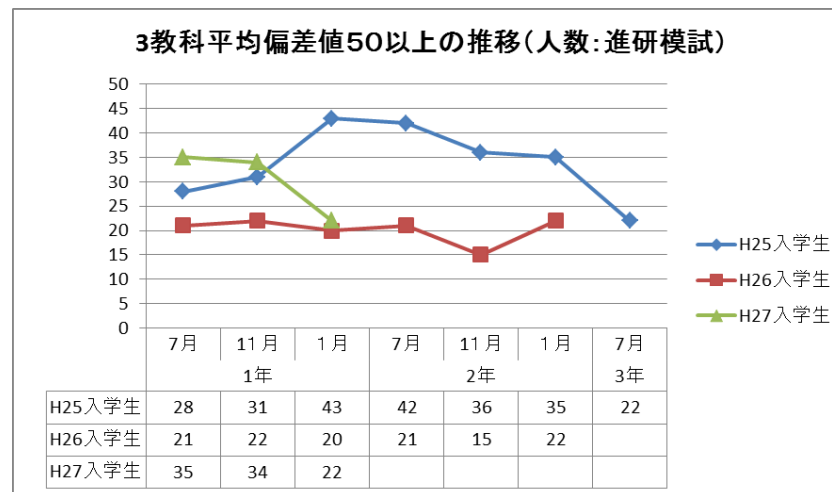
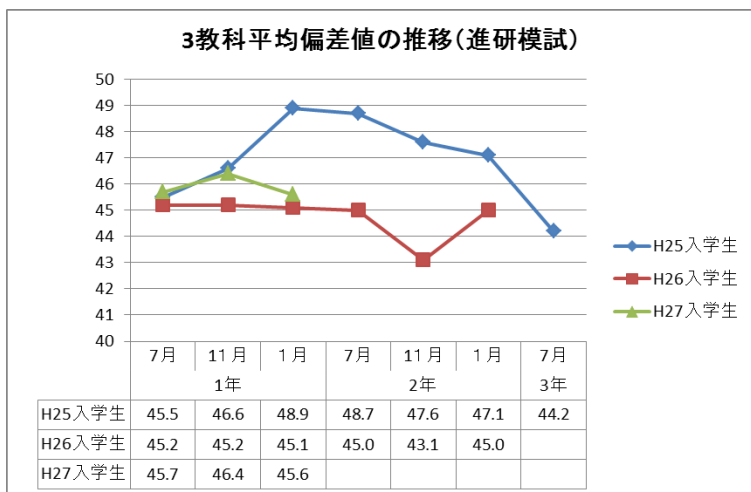
2 学年

- ・ 1月まで学習時間が伸びていなかったが、3年0学期の取組を進路指導部、学年会が連携して行い、学習への動機付けが図られ、学習時間が増える傾向にあった。

3 年生

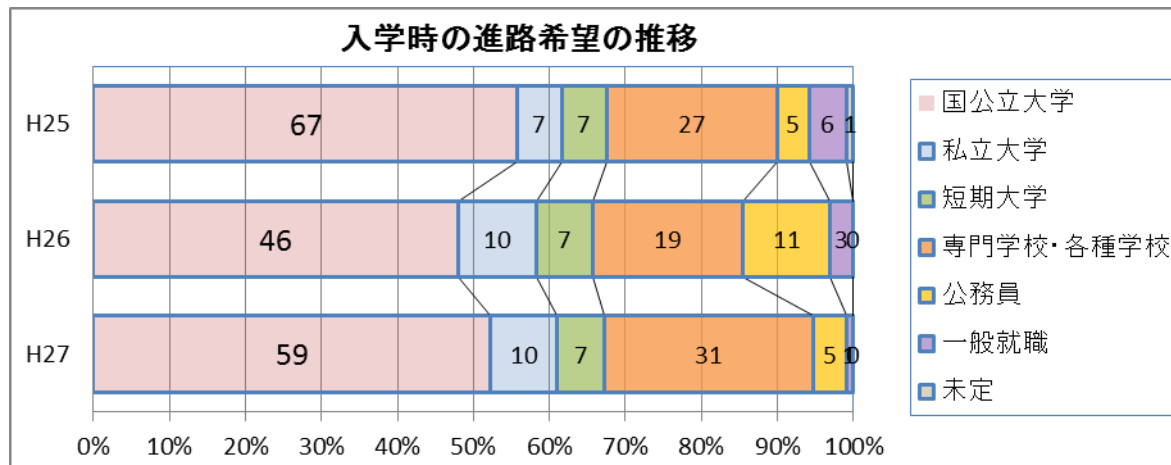
- ・ 夏休みまでは例年以上に家庭学習時間を確保することが出来たが、夏休み以降の受験学習が本格化する時期に伸びていない。進路希望が多岐化していることに対し、取組が対応し切れていない。

(2) 模試成績の進展状況



- ・ 入学してくる生徒の学力は、3教科の平均偏差値が45で、授業態度に課題を抱え、家庭学習の習慣が未定着な生徒が増えてきた。こうした1年生に対して、授業の受け方や予習・復習などの学習方法を重ねて指導した結果、11月模試において平均偏差値が1.1ポイント（対7月模試比）上昇した。しかし、1月模試において落込み、7月模試のレベルに戻った。高校生活に慣れた1年次の後半に課題がある。
- ・ 2年生においては、7月～11月の成績降下が数年続いている。12月上旬から学習意欲および進路意識の啓発の取組みを継続して行い、1月模試においては成績が持ち直したが、全体としては偏差値アップに至らなかった。特に修学旅行前後の時期に課題がある。授業を中心とした学習体制の再構築と、落ち着いて授業に取り組むための行事の精選と見直しも必要である。
- ・ 成績向上には、まず、自己の”強み”と”弱み”の教科科目を認識させることが大切である。好きな科目や得意科目に磨きをかけ、自信を付けさせるとともに、その過程で培ったノウハウを不得意科目に生かすことで、”弱み”の補強につなげることができる。また、特に英語や数学において理解度の差が広がり、同一課題での指導が難しくなっており、到達度別や分野別の課題提示などの工夫が必要である。
- ・ 進路に対するモチベーションを高め、生徒同士が競争心や向上心をもって切磋琢磨するクラスづくりや学年づくりが学校としての喫緊の課題である。成績層ごと定期的に学習意欲啓発セミナーを行うなどの方策が考えられる。また、各自が進路希望を実現するためには、英数国を中心に1、2年生のうちから模擬試験や大学入試問題演習などに、目的意識を持って取り組んでいかなければならない。そして3年生においては、理科・地歴・公民に進路決定のための学習の範囲を広げていくなど、3年間を見通した計画的な授業や家庭学習や補習体制の確立も急務である。

(3) 入学する生徒の意識の変化



- ・ 進路希望として、私立大学約 10%、短期大学 7% でほぼ一定であるが、国公立大学と専門学校の割合が年度により変動している。今年度は、専門学校希望者の割合が 30% を超えているのが特徴である。資格指向が強まり、それを直接生かせる専門学校への進学を考えている傾向がうかがえる。また、その資格も看護系など特定のものに偏る傾向が見られる。幅広い視野で進路選択できるように、1、2年のうちに様々な職業や職種、学問分野について「調べる」、「体験する」取組を「総合的な学習の時間」に位置づけることが必要である。すでに医療看護系の体験実習は年数回行っているが、「大学ナビゲーションセミナー」（大学教授等による模擬講義）など学びの体験も増やし、生徒の学問や進学への意欲の向上を図る取組も大切である。同時に3年において最後まであきらめずに「チャレンジ」するよう心の鍛錬も必要である。
- ・ 国公立大学を志望する場合、選択肢を狭めないため、今年度もセンター試験の受験型を5教科7科目（または6教科7科目）とする指導を行ってきた。しかし、実を伴わない形式的な補習参加にとどまり、結果的に成績が伸び悩んだ生徒もいるのが現状である。今後とも5教科7科目の受験を基本とする指導を継続するが、大学等の入学試験の選抜方法が多様化しており、生徒の”強み”を生かせる方法を探り、それに特化した指導など、生徒の成績実態や伸びを慎重に見極めた柔軟な対応も必要と考える。

(4) 学力推移と国公立大学合格者数（延べ数）

卒業年度	進研模試3教科平均偏差値50以上（人数）			国公立大学合格者数
	1年次7月	2年次7月	3年次7月	
H25年度卒業生	11	19	9	15
H26年度卒業生	19	26	19	23
H27年度卒業生	28	42	22	28

- ・ 国公立大学のAO・推薦入試で4名、前期試験で18名、中期・後期試験で6名の計28名が合格し、前年度+5名であった。また、難関私立大では、関西大学3名、立命館大1名（過年度）の合格者が出た。中でも昨年度の大阪大学外国語学部につき、国立大学薬学部（徳島大学）に1名合格したのは、大きな成果である。難関大学および難関学部の教科指導のノウハウが徐々に蓄積されてきたといえる。合格した生徒に共通していえることは、自学自習の習慣を身に付けていた点である。この習慣により、塾に依存することなく、高い志を持って、学校での授業と補習だけで、志望校に合格した生徒もいる。学習習慣の確立はその後の成績の向上に大きく左右する。

- ・ 国公立大学の入試において、C判定（ベネッセ駿台データ）以下からの逆転合格が5名出たことは、最後まで諦めず信念を貫き、チャレンジした成果といえる。国公立大学の合格者数の増大には、第一関門としてのセンター試験の出来が大きく影響している。一人でも多くの生徒が各教科科目とも得点率65%（国公立大学のチャレンジライン）の壁を越えられるように授業や補習計画を含めた抜本的な見直しを図るとともに、国公立大学にこだわるモチベーションを維持させ、粘らせる取組みが不可欠である。
- ・ AO・推薦入試において、合格率は40.0%（4名合格/10名受験）で、昨年度（13.3%）を大きく上回った。昨年度の課題を踏まえ、小論文指導に先立ち、教員研修を持ち、生徒の指導開始時期も6月に早め、生徒の実態に合わせた書き方の基本から指導したのが成果につながった。面接指導においては、第一段階として志望理由書を何度も書き直させ、志望動機を明確にさせたことで、その後の指導をスムーズに行うことができた。今後とも面接や小論文試験が増加する傾向にある。選抜試験のあるなしに関わらず、誰でもが身に付けるべき基礎力としての表現力やコミュニケーション力をさらに鍛える必要がある。その方策の一つとして、低学年から積極的に体験的活動に参加させ、異年齢の人とのふれあい経験を積ませることが考えられる。また、大学入試制度の抜本的見直しが進む中、選抜方法も多様化しており、プレゼンテーションや集団討議、教科に関する口頭試問などを適切に指導する組織力も求められている。

(5) 部活動参加率

	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
1年生	98	98	98	95	98
2年生	94	74	99	99	96
3年生	90	91	91	99	93

- ・ 4月の入部登録をさせる時に、1・2年生の未加入者にあらためて加入の働き掛けをしている。
- ・ 兼部している生徒もいるが、参加率は高い。

(6) 実用英語技能検定準2級以上取得者数

	平成23年度入学生	平成24年度入学生	平成25年度入学生	平成26年度入学生	平成27年度入学生
1年次	20	37	44	17	41
2年次	51	56	63	35	
3年次	63	60	66		

- ・ コミュニケーション英語Ⅰの授業において、英語検定の練習問題を取り入れた。
- ・ 英語表現Ⅰの授業において、英語検定２次試験の演習を行った。
- ・ １次試験・２次試験に向けて、徹底した対策を実施した。

(7) 生徒指導上における指導件数

	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
1年生	1	5	4	7	5
2年生	9	10	10	4	2
3年生	1	4	1	3	0

- ・ 指導の内容は、携帯電話の持ち込み・遅刻3回によるものであるが、携帯電話に係る指導件数が若干増加の傾向にある。
- ・ 携帯電話に係る違反者には生徒指導部が指導を行うとともに、必ず所属学年会において集会をもち指導を行った。

(8) オープンスクール参加者数

	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
中学生・保護者	200名	251名	176名	209名	222名

- ・ オープンスクールのテーマを「学びの世界」（パフォーマンス課題）と設定し、中学生の興味をひく模擬授業、クラブ体験を行った。
- ・ 近隣の高等学校と日程調整を行い、実施日を決定した。
- ・ 7月17日（土）に三次サングリーンで『格致DAY』を行い、吹奏楽部、邦楽部の演奏、茶道部、写真部、美術部の活動、ダンスグループISMのパフォーマンス等を行った。また、オープンスクールのPR（パンフレット配布等）を行った。
- ・ 中学校での高等学校説明会や本校での学校案内においてオープンスクールのPRを行った。

4 目標の設定

学校経営目標								
達成目標	評価指標	実績値			目標値	担当部等		
		H25年度	H26年度 (目標値)	H27年度 (目標値)	H28年度			
1 自主的精神に満ち、国際社会に通用し、自己実現を図るため自己管理をおこない、向上心を持った生徒を育成する。								
広島版「学びの 変革」アクション・プランに基づき、コンピテンシーの育成を通して、能動的に学ぶ生徒の育成を図る。	国際社会に通用する能力を習得させる。	英語検定準2級以上取得者数 (%)		54	42 (70)	42 (50)	50	英語科
	自己管理を図りながら学力の向上をめざす。	家庭学習時間 学年の平均家庭学習時間	1年	1.9	1.9 (2.0)	1.8 (2.0)	2.0	教務部
			2年	1.8	1.9 (3.0)	1.9 (2.5)	2.5	
			3年	3.2	3.1 (3.5)	2.7 (3.5)	3.5	
	進路希望を実現する。	模擬試験年間の3教科平均偏差値向上 (点)	1年	3.4	-0.1 (1.0)	-0.1 (1.0)	1.0	進路指導部
			2年	-0.3	-1.6 (1.5)	±0 (1.0)	1.0	
	国公立大学合格率 (%)			15.3	19.7 (35)	23.9 (25)	25	
探求力・思考力・判断力を伸ばし、表現力・コミュニケーション能力の習得をめざす。	パフォーマンス課題・評価等を活用した授業づくりをすすめる、論理的思考力・表現力の向上を目指す。	授業評価アンケート			(新規) 3.2 (3.3)	3.5	教務部	

2 人格の完成を目指し、豊かな心と生き抜く力を身につけた生徒を育成する。								
広島版「学びの 変革」アクション・プランに基づき、コンピテンシーの育成を通して、能動的に行動する生徒の育成を図る。	部活動の活性化を図る。	運動部で、週5日以上活動をし、常時部員の9割以上参加している割合。(%)		(新規)	100 (80)	85	生徒指導部	
		文化部で、発表・参加の行事回数が10回以上。(%)		(新規)	83.3 (80)	85		
	生徒会主催行事の活性化を図る。	自主活動回数	13	14 (13)	14 (14)	15		生徒指導部 特別支援委員会
		生徒満足度調査アンケート肯定的解答 (%)	80	98.2 (85)	98.5 (85)	90		
	高校生活で生ずる悩みを成長の糧とできる支援体制を確立する。	特別支援委員会の定例開催 (開校月1回程度)			(新規)	10		
		面接週間の設定(学期に一度)			(新規)	2		
教育相談体制に係る教職員アンケート肯定的回答 (%)				(新規)	70			
3 地域に信頼され、選ばれる学校づくりを進める。								
地域行事に積極的に参加する。	地域行事参加回数	20	20 (20)	22 (20)	20	総務部		
生徒数を確保する。	選抜(Ⅱ)の志願倍率	0.77	1.04 (1.05)	0.89 (1.05)	1.05			
	市内中卒入学率(%) 旧庄原市内中学	33	32 (35)	43 (35)	35			

5 行動計画

学校経営目標			
達成目標	本年度行動計画	中期行動計画	担当部等
1 自主的精神に満ち、国際社会に通用し、自己実現を図るため自己管理ができ必要に応じた力を身に付けようとする生徒を育成する。			
国際社会に通用する能力を習得させる。	<p>(1) 1年生全員の英検受験に向けて、次の組織的な指導を行う。</p> <p>① 1年生オリエンテーション合宿で、英検受験への動機付けを行う。</p> <p>② 英語表現Ⅰの授業において、リスニングや面接の対策を実施する。</p> <p>③ コミュニケーション英語Ⅰの授業において、英検過去問の演習を行う。</p> <p>④ 英検対策補習を実施（放課後1時間）するとともに、英検取得やGTECのスコアアップに向けた全学年合同の補習を実施する。</p> <p>(2) 総合的な学習の時間を活用し、次の事項を実現する。</p> <p>① 1年次は、英語表現Ⅰの授業などを通じて校内英語スピーチ大会を開催する。</p> <p>② 2年次は、視覚的補助（ビジュアルエイド）を用いて様々なトピックについて英語でプレゼンテーションができるようにする。</p>	<p>(1) コミュニケーションスキルとしての英語力向上の評価指標として、卒業時までの英語検定準2級以上取得者数を全体の55パーセント以上にする。そのため、入学時から英語検定受験にむけての意欲を高める工夫をし、授業においても対策を行う。</p> <p>(2) スピーチ・レシテーション等のプレゼンテーションを中核とし、総合的な学習の時間などを活用し、グローバル社会に、「世界に羽ばたき、挑戦する」人材を育成する。</p> <p>(3) パフォーマンス課題、ルーブリックによるパフォーマンス評価を活用した主体的な学びを推進し、グローバル社会で求められる論理的思考力・判断力・表現力を育成する。</p>	英語科

<p>自己管理を図りながら学力の向上をめざす。</p>	<p>(1) 毎月の家庭学習時間調査の分析をもとに、学年会、各教科と連携・協議し、課題を明らかにして改善を図る。</p> <p>(2) 学年会を中心に提出物の内容、提出期限に対する指導を徹底する。</p> <p>(3) 1年は「学習習慣の確立」、2年は「成果を実感できる」、3年は「自分で計画を立てる」をテーマに、課題の内容を工夫する。</p>	<p>(1) 家庭学習時間の結果からわかる課題を明らかにすることを通して、各学年、各教科の取り組みを促し、生徒の家庭学習への意欲を向上させ、学習習慣を確立させる。</p> <p>(2) 学習すべき内容を指導しなくても、自己の進路実現のために自律的に学習する生徒を育成する。</p>	<p>教務部</p>
<p>進路希望を実現する。</p>	<p>(1) 模試のデータ分析と生徒面談による生徒の実態把握を行い、個々の生徒の取組むべき課題とその改善策を提示し、授業・補習・家庭学習を1つの線で結び、確かな学力を養成する。</p> <p>(2) 希望する進路について「調べる」、「体験する」、ことを通して主体的な進路選択を図り、信念を貫き「チャレンジする」ための支援を行う。</p>	<p>(1) キャリア教育全体計画に基づき、生徒の進路に対するモチベーションを高めるとともに、3年間を見通した進路指導を充実させる。</p> <p>(2) 進路検討会議を年間計画に位置付けるとともに、回ごとの検討内容を明確にして、学年会を中心に学校全体で方向性を持った進路指導を実践する。</p>	<p>進路指導部</p>
<p>探求力・思考力・判断力を伸ばし、表現力・コミュニケーション能力の習得をめざす。</p>	<p>(1) パフォーマンス課題の質的向上を図り、生徒の論理的思考を促し、生徒が主体的に考え、表現する授業づくりを行う。</p> <p>(2) 生徒のコンピテンシーの向上を図るための、体系的な指導計画や評価方法などの教育課程の研究を進める。</p> <p>(3) 教員3人1組のグループでの授業作りにむけた研究・協議の体制を深化させる。</p> <p>(4) 難関大学入試問題にも対応できる論理的思考力・判断力・表現力を育成するため、難関大学入試問題を各教科で研究し、授業に活用する。</p>	<p>(1) 国立教育政策研究所の研究指定を受け、授業づくりの取り組みを深化・発展させるとともに、公開研究授業における研究成果の発表を基本とする計画的・組織的な取り組みを実施し、研究主題を実現する。</p> <p>(2) 授業評価アンケートやルーブリックを活用したPDCAサイクルの機能化を図る。</p> <p>(3) 教科会を活性化させ、教科内で入試問題を研究し、難関大学入試問題に対応できる論理的思考力・判断力・表現力の育成を目指した授業改善を図る。</p>	<p>教務部</p>

2 人格の完成を目指し、豊かな心と生き抜く力を身につけた生徒を育成する。			
部活動の活性化を図る。	<ul style="list-style-type: none"> (1) 学期当初（年2回）、未加入者に対し加入の働きかけを行う。 (2) 4月度に全校一斉に体験入部の部活動時間を設ける。 (3) 毎月クラブデーを設定し、全教職員が部活指導を一斉に行う日とする。 	<ul style="list-style-type: none"> (1) 新入生は、4月当初の100%入部を目標とする。 (2) 部活動加入率90%以上を維持していく。 (3) 各部の活躍状況をクラブ広報誌（「チーム格致」）、広報紙「格物致知」、掲示板を利用し紹介していく。 	生徒指導部
生徒会主催行事の活性化を図る。	<ul style="list-style-type: none"> (1) 生徒会を中心に、年度当初綿密な行事計画を企画立案させ、進捗状況を適宜チェックする。 (2) 厚生委員会を中心に、校外の清掃活動を月1回実施する。 	生徒会顧問を中心に、生徒会執行部を育成・指導し、生徒会執行部のリーダーシップにより、生徒たち自らが計画立案・実践できる生徒会を育成する。	生徒指導部
高校生活で生ずる悩みを成長の糧とできる支援体制を確立する。	<ul style="list-style-type: none"> (1) 特別支援委員会を定例開催し、特別な支援を必要とする生徒のみならず気になる生徒について情報交換し、対応を話し合って全校的な取組につなげる起点とする。 (2) 学期に一度、1週間、放課後の行事・会議を設定せず、正副担任を中心に全員の面接を行い、生徒の把握を行う。 (3) 職員研修を行い、より効果的な教育相談を行うことで、より生徒の悩みに寄り添い、より支援できる教職員集団を構築する。 	<ul style="list-style-type: none"> (1) 結果的に、第一希望の進路を実現できる生徒の裾野を広げている。 (2) 面接を起点とする個人指導、学級経営、学年経営が確立されている。 (3) 教職員一人一人が傾聴のスキルを身に付け、コーチングによる関わりができています。 (4) これまで支えることができなかった生徒を支えることができ、第一希望の進路を達成したうえで卒業にいたる生徒が増加している。 	

3 地域に信頼され、選ばれる学校づくりを進める。			
地域行事に積極的に参加する。	<p>(1) P T A 広報紙・学校広報紙（「格物致知」）等を活用し、取組み状況を紹介していく。</p> <p>(2) H P を利用し、地域行事への参加状況等を紹介する。</p>	<p>クラブ活動・奉仕活動等で庄原市・三次市の地域行事に参加し、その取組み状況を全教職員・全生徒が周知し、応援できる体制を作り上げていく。</p>	総務部
生徒数を確保する。	<p>(1) 地域の中学生にとって「行きたい高校」をめざし、入学志願者を増加させる。</p> <p>① 近隣中学校の「高校説明会」では、学校紹介の DVD を活用して行う。</p> <p>② 中学生の訪問に対し、模擬授業や先輩の体験談等内容の充実を図る。</p> <p>③ 三次市を会場に「格致 DAY」を開催し、文化系クラブの発表を行うことにより、三次市内の中学生や保護者に向けアピールする。</p> <p>④ オープンスクールでは、本校独自の「新しい学びの世界」についてアピールする。</p> <p>(2) 地元中学との日常的な連携～授業交流・クラブ交流～を通して、本校の魅力を発信するとともに、高校生として求められる生き方・在り方・学力についても発信する。</p> <p>(3) 学校行事を広報誌や H P で公開し、本校の活力をアピールする。</p> <p>(4) 地元中学校からの高校訪問（体験入学）は全学年の中学生を受け入れ、早い時期からの進路意識を持ってもらうよう中学校と連携をとり、実施する。</p>	<p>中学生・保護者向けの学校説明会、中学生・保護者対象の学校訪問、格致 DAY、オープンスクールそれぞれにおけるアピール戦略をしっかりと立てながら、組織的に動いていく。</p> <p>広報誌は定期的に作成し、行事だけではなく、出身中学別に卒業生の活躍ぶりや、進路先等を紹介する『特別号』を作成し、中学校を訪問する。</p>	総務部

